

冊子版

# 建設業で本当にあった 心温まる物語Ⅳ

～未来を担う若者のチカラ～

編・著 降旗 達生

約210社の建設業従事者、建設業と関わりのあった方より収集した『心温まる物語』を、57編に厳選、書籍化いたしました。

全57話から  
選りすぐりの  
6話を掲載



## 子どもたちに建設業への夢を与える

中高大学生に建設業の実績、すばらしさを伝えるための副読本として、建設会社が新卒生を募集する際の採用ツールとしてご活用いただいています。

特定非営利活動法人建設経営者倶楽部KKC

父の背中から学んだ、建設人としての姿勢（島根県 RKさん）

私が小学校低学年だったころの思い出です。父は土木業を営んでおり、登下校の途中、父の工事現場の前を通ることがしばしばありました。私の父は寡黙で非常に優しく怒った姿を見たり叱られたりする事はありませんでした。

ある日、いつもの様に友達と下校中、父の工事現場の前を通ると数人の職人さんと父が路肩コンクリートを打ち終わり、コンクリートの表面を仕上げる作業を行っていました。私は友達に

「僕のお父さんは何をしても怒らんけ〜この生コンクリートの上を歩いてやろうや」

と言い、仕上げたばかりのコンクリートの上を友達数人とドタドタ歩き、父の表情をうかがいました。すると、優しい父が顔を真っ赤にし、強張らせ持っていた鍬（こて）（コンクリート表面を平らに仕上げる道具）を投げつけ

「コラーツ何しとるだら〜」

と怒鳴ったのです。私は友達と一目散に逃げ出しました。

友達には「おっちゃん怒るがなあ」と言われましたし、父にはガツカリさせられたと、その時は思いました。

何日か経ったある日曜日、父に

「車に乗れ」と言われました。

どこへ連れていかれるのだろうかと思いつつ助手席で揺られていると、  
「着いたぞ。見てみる」と。

それは、ある砂防ダムの前でした。正直、なぜここに連れて来られたのか解りませんでした。子供ながらに「デカいなあ」と思いました。すると父が  
「ここを見てみる」

と、砂防に取り付けてある銘板を指しました。そこには父の会社の名前が刻まれていたのです。

私は「スゲー。お父さんがこれしたの？」と聞きました。

父は「お父さんもだけど〇〇さんや、〇〇さん、〇〇のおっちゃんやウチの会社の人全員でした。一人じゃ絶対にできん。お父さん達は誰が見ても恥ずかしくない物を造っていかんといけん」

と、静かに、そして力強く言いました。その父の姿を、三十年経っても忘れる事ができません。

そんな私も、父のあとを継いで左官工事業に就いています。

人間一人の無力さを心に留めるとともに、建設人として後世に残る物を作る仕事なんだという気持ちを忘れずに、鏝（こて）を持ちコンクリートをなでています。



## 建設機械好きな子どもに、最高の誕生日を（ATさん）

知り合いから聞いた心温まる物語です。

私の知り合いB君が会社に入って二年目のころ、地方の建設現場で上司と新築工事を行っていました。現場では様々な職種の方が働いていて、当時駆け出しだった彼は、分からないことだらけ。仕事を覚えたいため、毎日職人さんに付きっ切りで建設現場に張りつめていたそうです。建設現場事務所には、経理の若い女性がおり、仕事が終わるたびに、その女性と雑談をしました。女性と飲みに行ったりメールをしている中で、彼は

「何で建設現場で働いているのか？」

と尋ねたことがあります。すると、女性からは

「自閉症の息子がいて、息子がトラックやクレーンなどの建設機械が好きなので」という答えが返ってきたのです。

ある日、女性が

「一週間後、息子の誕生日で、学校の友達を誕生日パーティーに招待して

いるんですよ」

と、目を輝かせて話していました。とても楽しみにしていたようでした。一週間後、その息子さんの誕生日。彼も女性からのメールを楽しみにしていたのですが、彼女から来たメールは

「誰もパーティーに来てくれなかった」

という、悲しい内容でした。彼はとても悲しい気持ちになり、女性や息子さんの気持ちを考えると胸が張り裂けそうでした。

そこで彼は、あるアイデアを思いつきました。息子さんは、建設機械が好きとのことだったので、上司に相談してトラックとミニショベルを借りたのです。彼はトラックに乗り、途中で玩具のショベルカーを買って、大急ぎで女性の家に行きました。家には、事情を聞きつけた上司や職人さんがたくさん駆けつけており、息子さんはとても大喜び。女性はうれし泣きをしていました。最後に息子さんと現場の仲間と一緒に写真も撮りました。

「一生の思い出に残る誕生日だった」と、感謝されたそうです。ちなみにその女性は、今の彼の嫁さんだそうです。

どのような仕事にも、やりがいがある（北海道 TKさん）

防水工事会社に新卒で入社間もなく、工事現場で職人さんに作業を教えてもらいながら防水について学ぶという研修の日々が始まりました。

工事現場での作業が数週間経ち、慣れない作業や分からないことだらけで、心も体もクタクタになっていたときのことです。休憩中、親方さんと話す機会がありました

「防水の仕事って人目につかないことが多いのですね。防水の仕事をしていると人に話しても、みんな知らないから伝わりにくいし、地味すぎてやりがいを感じられないから他の業種で働きたいと思うこともあります」と、つい弱音を吐いてしまいました。すると、親方さんは声を荒げて言いましました。

「ばかやろう。地味で何が悪い。人から見える物を作る事がカッコいいとか、見えない物がカッコ悪いとかなんてないんだ。雨漏りしてしまうから、防水をしなければ人は住めないんだ。人から見えない部分が多くても重要な

仕事なんだ。俺が防水すれば雨漏りはしない自信がある。それが、俺のやりがいだ。」

そのとき、私は自分が勘違いをしていたことにハッと気付かされたのです。新入社員だったころから二十年経ち、今となっては

「自分が提案、管理、施工した防水は絶対雨漏りしない」と言えることが、自分のやりがいになっています。あのころ、親方さんに言われた言葉があったからこそ、現在も防水工事の仕事を続けることができていると思うのです。

その話をしてくれた親方さんが数年前に亡くなったと聞きました。

「見えるから見えなからとか関係なく、どのような仕事でも誇りを持ち、その中でやりがいを見つけて頑張っていく。」

大切なことを教えてくれた親方に、心から感謝しています。



建設業に「なんとなく」できる仕事はない（北海道 NKさん）

私は大学卒業後、地元に戻り、足場材のリース会社に就職。営業として社  
会人のスタートを切りました。最初は建設業というものを「何となく」理解  
し、営業として外へ飛び出しました。初めは社会に初めて飛び出した事もあ  
り、外でも営業で大変な事もありました。次第に、「なんとなく」流れを掴ん  
だ気になり、楽しさを感じながら、日々の業務を淡々とこなしていました。

自分でも気づかない間に、少しずつ緊張が緩みだしていったのです。ある日、  
一本の電話が鳴りました。足場材を納品した会社の所長からでした。

「何考えているんだ。大至急来い。」すぐに切られてしまった電話の後、緊張  
が押し寄せるように走りました。大至急現場にかけつけました。私は全く別  
現場への資材を納品してしまったようで、鳶の方約数十名が手を止めなくて  
はいけなくなり、現場はストップしている状態。すぐに本来納品すべきだつ  
た資材を手配し、元請会社に謝罪に向かいました。

「どうしてくれるんだ。厳しい工程の中、人の手配、物の手配、いろいろ

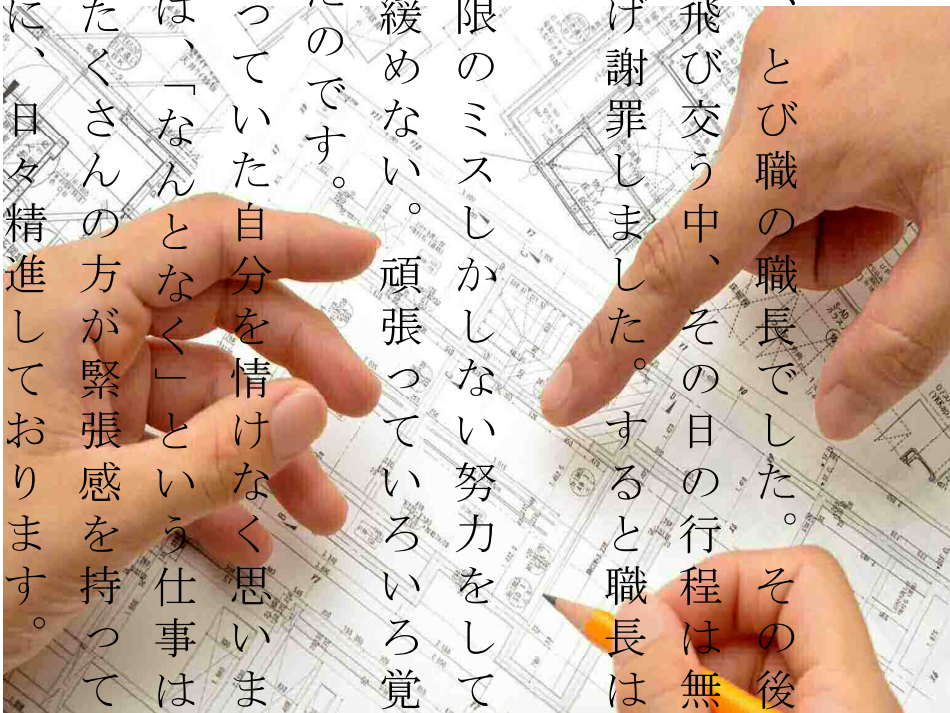
な段取りの中、現場は動いているんだ。お前の為に動いているわけじゃないんだ。」と怒られました。完全に自分の気の緩みがもたらした怠慢であったため、言い訳のしようがありませんでした。

「…何とかする。」

そう一言残し、現場へ向かっていったのは、とび職の職長でした。その後間もなくして資材が届き、とび職長の指示が飛び交う中、その日の行程は無事クリア。私はすぐに職長の所へ行き頭を下げ謝罪しました。すると職長は笑いながら

「ミスは誰にでもある。でも俺たちは最小限のミスしかしない努力をしている。命に関わるからだ。緊張はいつだって緩めない。頑張っているいろいろ覚えていけばわかるようにな。」と教えてくれたのです。

私はその言葉を聞き、すっかり緩んでしまっていた自分を情けなく思いました。建設業のみなさまを通じて教わった事は、「なんとなく」という仕事はない。現場は常にひとつの目標に向かって、たくさんの方が緊張感を持って努力しているということ。今もこのことを胸に、日々精進しております。



## 我が社初の女性現場監督が誕生したとき（愛知県　SSさん）

私が入社五年目のころ、会社説明で母校の高校に行った時の話です。ある一人の高校生が興味津々に私の話を聞いてくれたことを鮮明に覚えています。それは、最近では多くなってきた女性施工管理技術者を夢見る、女子生徒でした。生徒から

「施工管理技術者の大変さは何ですか、やりがいを感じる瞬間はなんですか」と様々な質問が飛び交う中、その女性は、

「設計者という立場ではなく、施工管理技術者として社会に出てやっていきますか」と尋ねたのです。

正直回答に戸惑いました。なぜなら、当時うちの会社には女性施工管理技術者が一人もいなかったからです。人の人生を左右する会社説明会で適切なことは言えません。私なりの考えを全て伝えました。その中でも自信を持つと言えることがありました。当社には、施工管理技術者としてのスキルを学べる環境があるということ。私自身のような、高校を卒業したばかりで右も

左もわからない人材をここまで育てあげてくれたのは間違いなく会社だと思えるからです。

「女性だけにしか分からない辛さや困難は必ずある」とも伝えた上で、「しかし、一人ではない。会社の方、業者の方、お客様までもがあなたの力になってくれるはずですよ」と自信を持って言うことができました。

それから一年後、思いもよらぬ事が起きました。なんと、その女子生徒が我が社に入社したのです。それは会社にとっても大きな一歩であり、初の女性施工管理技術者としての試みでした。

社長の計らいもあり、私の部下として新築現場を担当しました。あの時の私の言葉に後押しされたと聞いて、心底大切に育ててあげたいと思ったのが本音です。今では立派な女性施工管理技術者として現場主任を任されるようになりました。今でも、納まりや現場での苦労について相談しに来てくれることもあります。部下とそんな関係を築ける会社の風土を誇らしく思えた瞬間でもありました。女性施工管理技術者がやりがいをもって、男女隔てなく動ける環境に大変感謝しています。

小さい仕事でも、見ていてくれる人がいる（愛知県 HKさん）

私が若いころの話です。まだ仕事の経験も浅く、資格も二級土木施工管理技士しか所持していなかった私は、会社から任される工事現場は小規模なものばかりでした。

先輩達のように一級土木施工管理技士を取得するため、毎日必死に勉強していました。

ある日、工事現場で仕事をしていると、近くの一般の方が訪ねてきました。訪ねてきた方は、工事現場の近くに住む主婦の方で、一度工事前に工事現場説明に伺ったこともある方でした。

「仕事中すみません。子供がどうしても一緒に聞いてほしいと言いました。：。」

女性の後ろには、小学校一、二年くらいの小さな男の子が立っていました。「この子が現場監督さんになりたい。現場監督さんになるにはどうすればなれるか聞いてとうるさくて。いつも工事を見ていたみたいです。」

それを聞いた私は、

「苦情でなくてよかった」

と胸をなでおろすと同時に、何と答えていいか言葉に詰まりました。なぜなら、経験も浅く、小さな工事現場しか担当していなかったからです。そんな私の姿をいつも見て、「現場監督」という仕事に憧れている小さな子に、どう答えればいいのでしょうか。私はしどろもどろに

「現場監督になるには資格が必要です」

と、答えました。

女性は男の子に

「ほら。このお兄さんが言ってるよ。勉強しないとお兄さんみたいな立派な現場監督さんにはなれないんだよ。頑張って勉強しないとね」

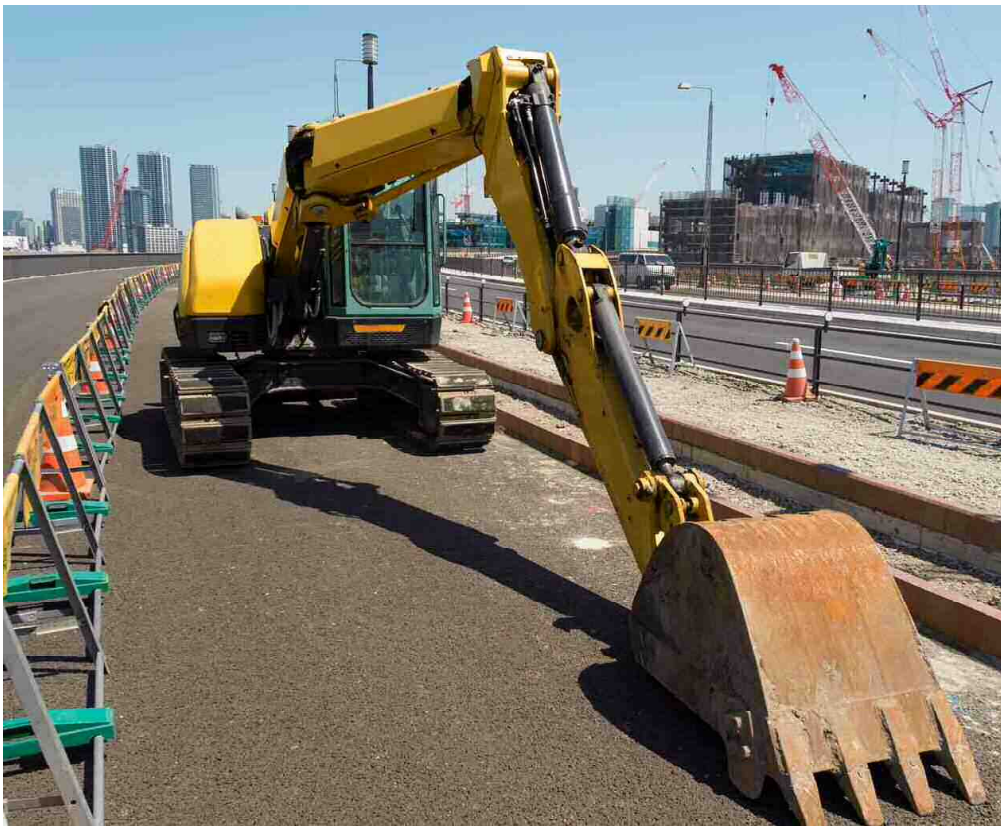
と言いました。すると、男の子はうなずき

「勉強いっぱいして現場監督さんになる。」

と嬉しそうにしたのです。

まだまだ未熟で、一級土木施工管理技士の資格を持っていなかった私が、

建設業に憧れて「現場監督」になりたいという小さな子に、どうすればなれるかを教えるのは恥ずかしかったことを覚えています。一方で、いつも私の姿を見ていて、私と同じ仕事がしたいと思ってくれたことは本当に嬉しかったですね。このことがきっかけに、自分の仕事にも誇りが持てるようになりました。





## 編・著者略歴

### 降旗 達生(ふるはた たつお)

NPO法人建設経営者倶楽部KKC理事長/ハタコンサルタント株式会社代表取締役

小学生の時に映画「黒部の太陽」を観て、困難に負けずにトンネルを掘り進む男たちの姿に憧れる。1983年大阪大学工学部土木工学科卒業後、株式会社熊谷組にてダム工事、トンネル工事、橋梁工事など大型工事に参画。

阪神淡路大震災にて故郷兵庫県神戸市の惨状を目の当たりにして開眼。技術コンサルタント業を始める。建設技術者研修5万人、現場指導2000件を超え、建設業界からの信頼が厚い。「がんばれ建設～建設業業績アップの秘訣～」は読者数12,000人、日本一の建設業向けメールマガジンとなっている。

著書に「その仕事のやり方だと、予算と時間がいくらあっても足りませんよ。」(クロスメディア・パブリッシング)、「その一言で現場が目覚める」(日経BP社)、「受注に成功する！土木・建築の技術提案」(オーム社)、「技術者の品格其の一、其の二」(ハタ教育出版)など。



建設業は、東京スカイツリーを造るような高い技術が必要な仕事から、単純な仕事まで、奥が深い職種です。さらには大工さんのような手先の器用さが必要な仕事から、重い物を運ぶような強い力が必要な仕事まで幅が広い職種です。つまり奥深く、幅広い業界です。どんな人も受け入れることのできる業界です。まさに、あなたの居場所はここにあります。

建設業は奥深く、幅広いがゆえに、感動の物語、心温まる物語があふれています。そんな「建設業で本当にあった心温まる物語」を2012年より全国で建設業に従事している2000人に書いていただきました。今回はその4回目をお届けしました。まさに「建設業は地球の彫刻家」であることを実感されたことでしょう。次に心温まる物語をつむぐのはあなたです。(おわりにより抜粋)

### 書籍版『建設業で本当にあった心温まる物語Ⅳ～未来を担う若者のチカラ～』

編・著 降旗 達生

制作 特定非営利活動法人建設経営者倶楽部KKC

発行 ハタ教育出版



「書籍版」は下記ホームページからお買い求めいただけます。

◇NPO法人建設経営者倶楽部KKC URL:<http://kk-c.net/>

◇ハタ コンサルタント株式会社 URL:<http://www.hata-web.com/>

お問合せは**0120-926-810**まで